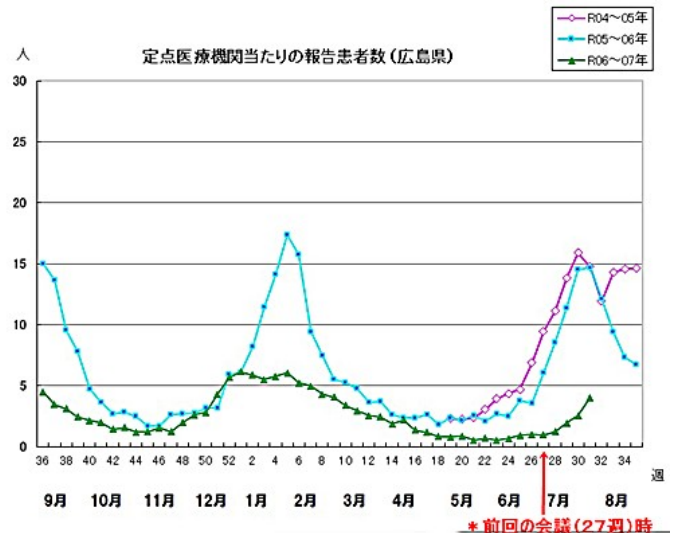
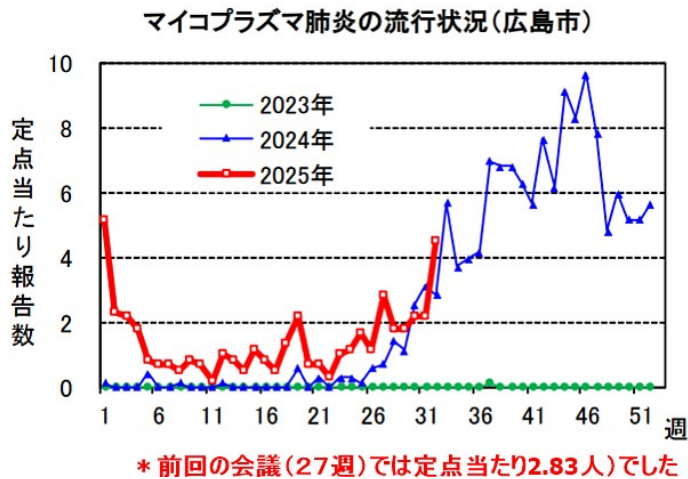


2025年第32週（8月4日～8月10日）

1 マイコプラズマ肺炎

定点当たり4.50人と、増加しています。手洗いの励行、咳エチケットなどの感染予防対策を心がけましょう。



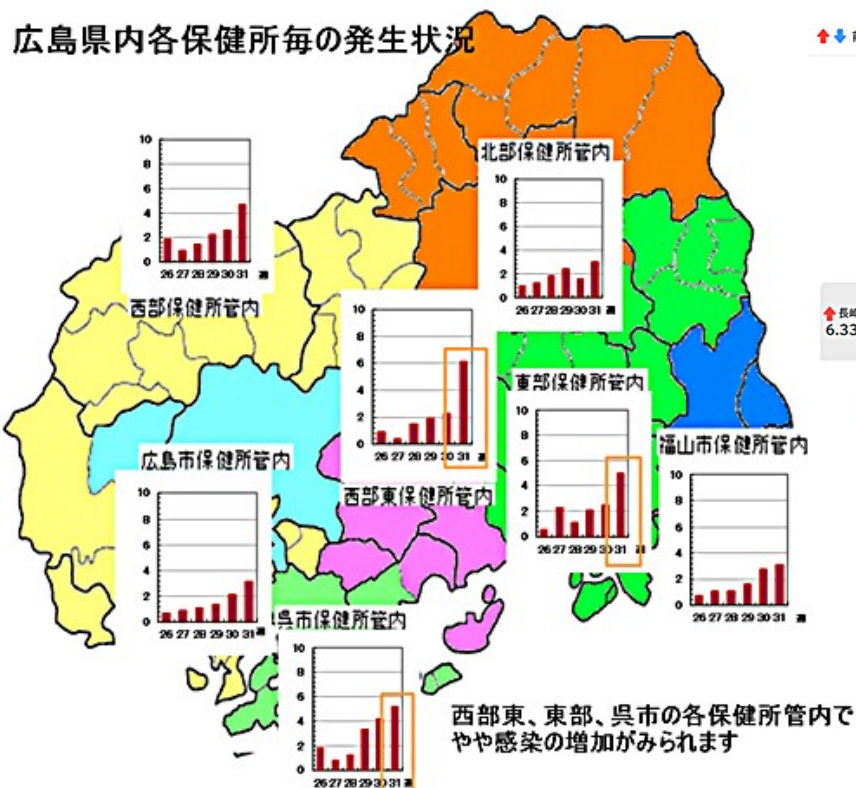
2 新型コロナウイルス感染症

定点当たり3.09人の報告がありました。全国的に増加傾向であり注意が必要です。

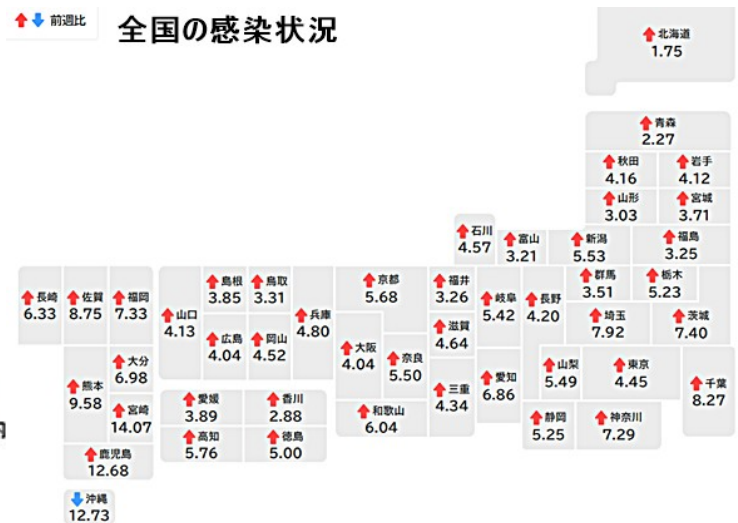
(症状は軽症例が多いようですが、感染力は依然として強力です)

手洗いの励行、咳エチケット、換気など、基本的な感染予防対策を心がけましょう。

広島県内各保健所毎の発生状況



全国の感染状況



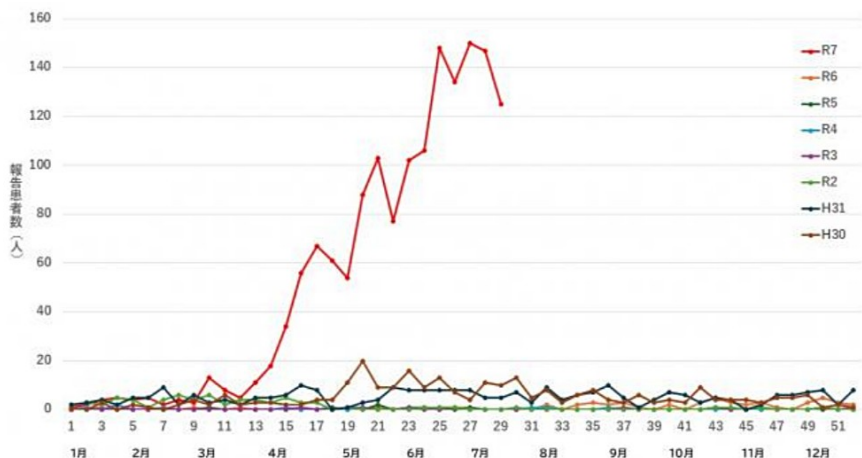
3 百日咳（広島市の情報は更新無しにて、こちらの項目のみ広島県の情報を）

広島県における百日咳の患者報告数が2018年1月1日に5類全数把握疾患に指定されて以降最も多くなっています。

小学生及び中学生を中心とした10代以下に患者が集中しています。

家庭内での感染が患者数の約半数を占めています。特に、1歳以下の乳児では肺炎、脳炎で重症化しやすく、6か月以下では死亡することもあるため、生後2か月からの定期予防接種を速やかに受けるとともに、乳児のいる家族や出産予定の家族は、咳が長く続くまで放っておくのではなく、早目に受診しましょう。

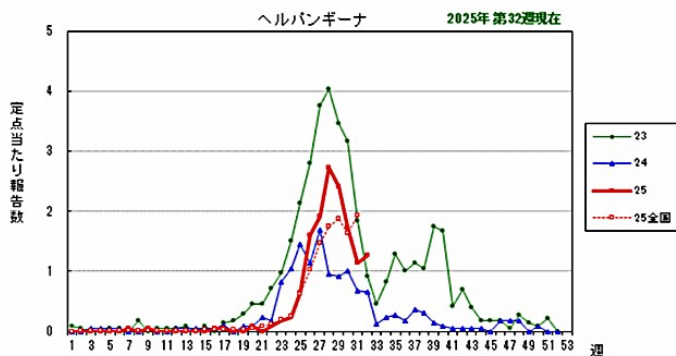
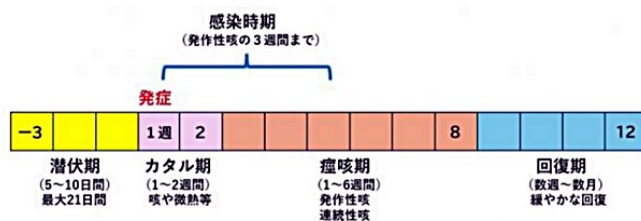
感染者数（広島県）



4 ヘルパンギーナ

前回の会議時(第27週)には定点当たり1.91人の報告が有りました。その後、増加を来しましたが現在は減少傾向と思われます。

症状と経過



5 伝染性紅斑

依然、感染者数が高い状態が続いています。

伝染性紅斑は、ヒトパルボウイルス B19 による感染症です。小児を中心にみられる流行性の発しん性の病気です。両頬がリンゴのように赤くなることから、「リンゴ病」と呼ばれることもあります。約10～20日の潜伏期間の後、微熱やかぜの症状などがみられ、その後、両頬に蝶の羽のような境界鮮明な赤い発しん（紅斑）が現れます。続いて、体や手・足に網目状やレース状の発しんが広がりますが、これらの発しんは1週間程度で消失します。



これまで伝染性紅斑に感染したことの無い女性が妊娠中に感染した場合、胎児にも感染し、胎児水腫などの重篤な状態や、流産のリスクとなる可能性があります。熱や倦怠感が出現した後に発疹が出るなど、伝染性紅斑を疑う症状がある場合は、医療機関に相談しましょう。また、感染しても症状がない場合（不顕性感染）もあるため、周囲に伝染性紅斑の人がいる場合は、妊婦健診の際に、医師に伝えてください。